本の事

芥川龍之介

青空文庫

各国演劇史

僕は本が好きだから、本の事を少し書かう。僕の持つてゐる洋綴の本に、妙な演劇史が一冊ある。この本は明治十七年一月十六日の出版である。著者は東京府士族、警視庁警視属、永井徹と云ふ人である。最初の頁にある所蔵印を見ると、嘗は石川一口の蔵書だつたらしい。序文に、「夫演劇は国家の活歴史にして、文盲の早学問なり。故に欧洲進化の国に在ては、縉紳貴族皆之を尊重す。而してその隆盛に至りし所以のものは、有名の学士羅希に出て、之れが改良を謀るに由る。然るに吾邦の学者は夙に李園（原）を鄙み、措て顧みざるを以て、之を記するの書、未嘗多しとせず。即文化の一具を欠くものと謂可し。（中略）余茲に感ずる所あり。寸暇を得るの際、米仏等の書を繙き、その要領を纂訳したるもの、此冊子を成す。因て之を各国演劇史と名く」とある。羅希に出た有名の学士とは、希臘や羅馬の劇詩人だと思ふと、それだけでも微笑を禁じ得ない。本文にはさんだ、三葉の銅版画の中には、「英国俳優ヂオフライ空窖へ幽囚せられたる図」と云ふのがある。その画が又どう見ても、土の牢の景清と云ふ気がする。ヂオフライは勿論 Geoffrey であらう。英吉利の古代演劇史を知るものには、これも噴飯に堪へないかも知れない。次手に本文の一節を引けば、「然るに千五百七十六年女王エリサベスの時代に至り、始めて特別演劇興業の為め、ブラツク・フラヤス寺院の不用なる領地に於

て劇場を建立したり。之を英国正統なる劇場の始祖とす。而て此はレスター伯に属し、ゼームス・ボルベージ之が主宰たり。俳優にはウイリヤム・セキスピヤと云へる人あり。当時は十二歳の児童なりしが、ストラタフオルドの学校にて、羅甸並に希臘の初学を卒業せしものなり」と云ふのがある。俳優にはウイリヤム・セキスピヤと云へる人あり！　三十何年か前の日本は、髣髴とこの一語に窺ふ事が出来る。この本は希覯書でも何でもあるまい。が、僕はかう云ふ所に、捨て難いなつかしみを感じてゐる。もう一つ次手に書き加へるが、僕は以前物好きに、明治十年代の小説を五十種ばかり集めて見た。小説そのものは仕方がない。しかしあの時代の活字本には、当世の本よりも誤植が少い。あれは一体世の中が、長閑だつたのにもよるだらうが、僕はやはりその中に、篤実な人心が見えるやうな気がする。誤植の次手に又思ひだしたが、何時か石印本の王建の宮詞を読んでゐたら、「御池水色春来好、処処分流白玉渠、密奏君王知入月、喚人相伴洗裙裾」と云ふ詩の、入月が入用と印刷してあつた。入月とは女の月経の事である。（詩中月経を用ひたのは、この宮詞に止まるかも知れない。）入用では勿論意味が分らない。僕はこの誤にぶつかつてから、どうも石印本なるものは、一体に信用出来なくなつた。何だか話が横道へそれたが、永井徹著の演劇史以前に、こんな著述があつたかどうか、それが未に疑問である。未にと云つても僕の事だから、別に探して見た訣ではない。唯誰かその道の識者が、教を垂れて呉れるかと思つて、やはり次手に書き加へたのである。

天路歴程

僕は又漢訳の Pilgrim's Progress を持つてゐる。これも希覯書とは称されない。しかし僕にはなつかしい本の一つである。ピルグリムス・プログレスは、日本でも訳して天路歴程と云ふが、これはこの本に学んだのであらう。本文の訳もまづ正しい。所々の詩も韻文訳である。「路旁生命水清流　天路行人喜暫留　百果奇花供悦楽　吾儕幸得此埔遊」――大体こんなものと思へば好い。面白いのは銅版画の挿画に、どれも支那人が描いてある事である。Beautiful の宮殿へ来た所なども、やはり支那風の宮殿の前に、支那人の Christian が歩いてゐる。この本は清朝の同治八年（千八百六十九年）蘇松上海華草書院の出版である。序に「至咸豊三年中国士子与耶蘇教師参訳始成」とあるから、この前にも訳本は出てゐたものらしい。訳者の名は全然不明である。この夏、北京の八大胡同へ行つた時、或清吟小班の妓の几に、漢訳のバイブルがあるのを見た。天路歴程の読者の中にも、あんな麗人があつたかも知れない。

Byron の詩

僕は John Murray が出した、千八百二十一年版のバイロンの詩集を持つてゐる。内容は Sardanapalus, The Two Foscari, Cain の三種だけである。ケエンには千八百二十一年の序があるから、

或は他の二つの悲劇と共に、この詩集がその初版かも知れない。これも検べて見ようと思ひながら、未にその儘打遣つてある。バイロンはサアダナペエラスをゲエテに、ケエンをスコツトに献じてゐる。事によると彼等が読んだのも、僕の持つてゐる詩集のやうに、印刷の拙い本だつたかも知れない。僕はそんな事を考へながら、時々唯気まぐれに、黄ばんだペエヂを繰つて見る事がある。僕にこの本を贈つたのは、海軍教授豊島定氏である。僕は海軍の学校にゐた時、難解の英文を教へて貰つたり、時にはお金を借して貰つたり、いろいろ豊島氏の世話になつた。豊島氏は鮭が大好きである。この頃は毎日晩酌の膳に、生鮭、塩鮭、粕漬の鮭なぞが、代る代る載つてゐるかも知れない。僕はこの本をひろげる時には、そんな事も亦思ふ事がある。が、バイロンその人の事は、殆念頭に浮べた事がない。たまに思ひ出せば五六年以前に、マゼツパやドン・ジユアンを読みかけた儘、どちらも読まずにしまつた事だけである。どうも僕はバイロンには、縁なき衆生に過ぎないらしい。

かげ草

これは夢の話である。僕は夢に従姉の子供と、三越の二階を歩いてゐた。すると書籍部と札を出した台に、Quarto 版の本が一冊出てゐた。誰の本かと思つたら、それが森先生の「かげ草」だつた。台の前に立つた儘、好い加減に二三枚あけて見ると、希臘の話らしい小説が出て

来た。文章は素直な和文だつた。「これは小金井きみ子女史の訳かも知れない。何時か古今奇観を読んでゐたら、村田春海の『笠志船物語』と、ちつとも違はない話が出て来た。この訳の原文は何かしら。」――夢の中の僕はそんな事を思つた。が、その小説のしまひを読んだら、「わか葉生訳」と書いてあつた。もう少し先をあけて見ると、今度は写真版が沢山出て来た。みんな森先生の書画だつた。何でも蓮の画と不二見西行の画とがあつた。写真版の次は書簡集だつた。「子供が死んだから、小説は書けない。御寛恕下さい」と云ふのがあつた。宛は畑耕一氏だつた。永井荷風氏宛のも沢山あつた。それは皆どう云ふ訣か、荷風堂先生と云ふ宛名だつた。「荷風堂は可笑しいな。森先生ともあらうものが。」――夢の中の僕はそんな事も思つた。それぎり夢はさめてしまつた。僕はその日五山館詩集に、森先生の署せられた字を見てゐた。それから畑耕一氏に、煙草を一箱貰つてゐた。さう云ふ事が夢の中に何時か織りこまれてゐたと見える。Max Beerbohm の書いた物に自分の一番集めたい本は、本の中の人物が書いたと云ふ、架空の本だと云ふのである。が、僕は「新聞国」の初版よりも、この Quarto 版の「かげ草」が欲しい。この本こそ手に入れば希覯書である。

（大正十年十二月）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行
　1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
2007年6月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

本の事

芥川龍之介

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/